

文法対照研究と翻訳

林 璋

一、何を対照研究の材料とするか

言語の対照研究は、二つ（あるいはそれ以上）の言語を対象とするわけであるが、文法レベルの対照においては、具体的にどんな言語事実を以って対照研究の分析対象とすべきであろうか。

石綿、高田（1991）によれば、「対照分析は、二つの言語の間の相対応する部分について行われるわけであるから、分析を始めるに当たっては、まず、何と何とが相対応する要素であるかということを明確にしなければならない。すなわち、何と何、どの部分とどの部分とが『等価』（equivalent）であるかということを明らかにしなければならない。」（P12）と言う。つまり、対照分析をする前に、対照可能な材料を選別しなければならないということである。そして、対照可能と認める基準は相対応するかどうかで、さらに、相対応するかどうかを判断する基準は、「等価」だということである。「等価」の中身については、「『等価』であるとするのは、したがって、その表現の指示するもの、すなわち、指示物（referent）が相対応し、それを指し示す文の意味、すなわち、指示（reference）に相当する部分が可能な限り相対応している二つの表現、さらには、コミュニケーション上の働きが相対応する表現の間に成立することがらであるということになろう。」（P15）と見ており、「実際には、『等価』というのは擬似的に等しいということである」と言っている。（P16）言い換えれば、二つの表現の「所記」とコミュニケーション上の働きが同じだという前提で、しかも「能記」が「可能な限り相対応する二つの表現」を以って対照すると言っているのである。

それによれば、対照可能な材料は、所記とコミュニケーション上の働きを想定した上の作例と、あるテキストの訳文だということになる。石綿、高田（1991）では、前者の場合、

- (1) a Confucious was a native of the state of Lu.
b 孔子是鲁国人。

のようなもので、後者の場合は、

- (2) a He felt like a fool.
b ……四月の闇に囲まれたこの明るい安全な部屋で、何でも言えるようにうちとけたなと思った瞬間に、アンジェラの冷たい細い声がピートをいらいらさせた。まるでおれは馬鹿みたいだなと思った。(アップダイク『カップルス』宮元陽吉訳)

のようなものである。対照研究も目的によって、材料の使い方も違う場合があるものの、上記のような「等価」の基準では、材料の選定に不確定な要素がまだ残っている。

石綿、高田(1991)では、コミュニケーション上の働きが同じだということで、

- (3) a Guten Tag!
b こんにちは。

のようなものを等価な表現として、対照可能としている。「(3) a は、“Ich wunsche Ihnen einen guten Tag.”の一部であり、(3) b を『こんにちはごきげんいかがですか』が基にあるとかりに考えるとして、この2文の『意味』はズいぶんと違うといわざるをえない。しかし、『あいさつをするときの発話』というきのうとしては、非常に似た働きをしていると考えられ、(3) a と(3) b とを同じ内容を持った等価な表現として扱うことができる。」(P15) そうすると、例(1)、(2)と(3)はそれぞれ異なった「等価」の性質を持つことになる。「等価」という選定の基準について検討する必要がある。

二、「等価」について

「等価」は、翻訳論上訳文を評価する基準として、訳者の翻訳作業に大きく影響を与えることから、翻訳論のほうで盛んに議論されてきたものである。Wolfram Wilss (1982)によれば、等価の問題は二千年来翻訳論において中心

的な課題として議論されてきており、現代の翻訳研究においても中心的な課題である。「等価という術語は最初、機械翻訳で使われた。翻訳論のほうでは、ヤーコブソンが『翻訳の言語学的側面について』（1966）という論文で『等価』という術語を使ったのは最初であろう。氏が作った『相違における等価』という概念は、翻訳論の発展に大きく貢献したから、その論文も翻訳論上の経典となったのである。」（P129）実際、この術語は五十年代に既に使われていたが、「しかし、ヤーコブソン以前は、この語の意味が曖昧で、口語体の意味合いを持っていた。」（P129）

ヤーコブソンは「翻訳の言語学的側面について」という論文において、翻訳と言語研究の関係についてこう語っている。「言葉の記号を解釈する三つの方法を区別することができる：それは同じ言語の他の記号に、あるいは、他の言語に、あるいは、別の、言葉でない記号の体系に翻訳され得る。これらの三種類の翻訳には、それぞれ異なった名標をつける必要がある：

- 1) 言語内翻訳、すなわち、言い換え rewording は、ことばの記号を同じ言語の他の記号で解釈することである。
- 2) 言語間翻訳、すなわち、本来の翻訳 translation は、ことばの記号を他の言語で解釈することである。
- 3) 記号法間翻訳 intersemiotic translation すなわち、移し換え transmutation（P57）は、ことばの記号をことばでない記号体系の記号によって解釈することである。」（P58）

そして、言語間翻訳の「等価」については、「最も頻繁には、ある言語から別の言語への翻訳は、一言語によるメッセージを或る他の言語の個々のコード単位に置き換えずに、メッセージ全体に置き換える。このような翻訳は一種の伝達話法 reported speech である。つまり、翻訳者は別の情報源から得たメッセージを再びコード化し、伝送する。こうして、翻訳は、二つの異なったコードによる二つの等価のメッセージを含むのである。」（P58）と述べている。つまり、翻訳は「コード単位」で等価的に行われるのではなく、常にメッセージレベルで等価を求めるのだということである。これは、ヤーコブソンの「相違における等価」であるが、ヤーコブソンが挙げた根拠は、「英語の“cheese”は、それに相当する標準ロシア語の同義異音語“сыр”と完全には同定され得ない。白チーズは*（*原語は cottage cheese. レンニン（凝乳酵素）を用いないで凝乳に塩味をつけて作る白く柔かいチーズをいう。）cheese ではあるけれども、сыр ではないからである。」（P58）というように、「コード単位」すなわち語

レベルの問題である。

ヤーコブソンとほぼ同じ時期に、Catford (1965) も「等価」について詳しく論述している。Catford によれば、翻訳論の中心的な課題は翻訳等価関係の性質と条件を確定することだという。「翻訳実践の中心的な課題は、翻訳等価成分を見つけることである。翻訳論の主な任務は翻訳等価関係の性質と条件を定義することである。」(P 25) そして、「翻訳」について、「一種の等価的原語(目標言語)のテキスト材料(textual material)を以って、もう一種の言語(起点言語)のテキスト材料を置き換える。」(P 24) と定義している。この定義から、Catford の「等価」がテキストレベルのものだということが分る。これは、メッセージ全体の等価であり、各文法レベルにおいて一々等価的でなくてもよいことになる。だから、「一般的には、あるランクにおいて等価関係がゼロになっている場合は、上位のランクにおいて等価関係を確立せざるを得ないことを意味する。」(P 35) だから、Catford は起点言語と目標言語のテキストを比較することによって認めた翻訳等価関係を「経験的現象」と見ている。

この翻訳等価関係を経験的現象から言語学的手段に切り替えるには、Catford は、「翻訳等価成分」という概念を作った。「テキスト等価成分とは、起点言語のテキストの与えられる部分が変化することによってのみ、それに対応する部分の目標言語のテキストが変化することである。 My son is six をフランス語に訳す例で言えば、我々は Your daughter is six の翻訳を試みることができる。その場合、目標言語のテキストが Votre fille a six ans となる。目標言語のテキストで変化の生じた部分 (Mon fils/Votre fille) が起点言語の変化した部分 (My son/Your daughter) の等価成分と見なされることになる。」(P 33)

しかし、これを日本語に訳すと、文法よりも表現のことが表面化してくる。

- (5) a My son is six.
- b 息子は六つです。
- c 私の息子は六つです。
- (6) a Your daughter is six.
- b 娘さんは六つです。
- c あなたの娘さんは六つです。

可能な訳文がまだまだあると思われるが、上記のような判定基準では等価成分

を確認するのは難しいだろう。もっとも、(5)と(6)は、一文でかつ待遇のことも絡んでいるから、等価の判断が難しくなるわけであるが、もっと長い文章ならこの揺れが解消して、いずれかに定着するだろう。でも、これらの例からも、訳文は特定のコンテキストの下で得られるものだということが分かる。そして、仮に等価成分が得られたにしても、Catfordの方法では、言語学的に認定できるものは語レベルかフレーズレベルのものでしかない。Catfordは、翻訳作業を言語学の軌道に載せようとしているが、等価への認識に限って言えば、ヤーコブソンの「相違における等価」には及んでいない。

このように、「等価」は、あくまでもコンテキストに左右されるもので、Catfordが言っているように、経験的現象である。このような経験的、あるいは直感的な判断による「等価」な訳文は、文法対照研究の材料としてどの程度まで信頼できるか、疑問すべきところだと思われる。

三、直訳について

文法対照研究は、何らかの形で翻訳と関わりを持っている。ここでは、対照研究において直接「翻訳」を取り上げて二言語の表現を考察する研究者が翻訳のことをどう見ているのかについて見てみたい。

影山(1996)が次の「英語例を日本語に直訳すると、不自然な日本語になってしまう。」(P 7)と言っている。

- (7) a. He used to walk to the studio where he was learning to paint.
 ?*彼は絵を習っているスタジオに歩いたものだ。
 b. They walked to the door.
 ?*彼らは入り口に歩いた。
 c. She walked into the studio.
 ?*彼女はスタジオの中に歩いた。

そのほか、影山(1996)では、「直訳する」とほぼ同じ意味において、「対応する」という言い方が使われている。「push」と『押す』を比較しても、He pushed the cart into the garage.に対応する日本語『?*ガレージの中に荷車を押した』は不自然である。」(P 7)

直訳は、翻訳の方法の一つとして、意識や逐語訳と対立関係にあるとされる

が、日本では、「直訳」などが普通どう理解されているか、辞書の説明を調べてみた。『広辞苑』（第四版）では、「直訳」は「外国語をその原文の文字や語法に忠実に翻訳すること。」であり、「逐語訳」は「原文の一語一語に即して、忠実に翻訳・解釈すること。直訳。逐字訳。」であり、「意識」は「原文の一語一語にこだわらず、全体の意味に重点をおいて訳すこと。また、その訳したもの。」である。直訳と逐語訳はほとんど変わらない。『カラー版国語大辞典』では、「直訳」は「原文を字句・文法にしたがって一語一語忠実に訳すこと。逐語訳。literal translation」, 「逐語訳」は「原文の一語一語に忠実である訳し方。その訳。逐字訳。literal translation」, 「意識」は「字句にこだわらないで、意のあるところを訳すこと。その訳。free translation」である。「直訳」と「逐語訳」に関しては、説明の文字こそ異なるものの、参考としての英語の用語は同じである。これで、日本では、観念の上で区別する翻訳の方法は、直訳・逐語訳対意識の二種であることが分かる。

だが、辞書の説明は、あくまでも普通の理解で、学問的ではない。少なくとも、翻訳された結果がどうなるかは説明されていない。「外国語をその原文の文字や語法に忠実に翻訳すること。」, あるいは「原文を字句・文法にしたがって一語一語忠実に訳すこと。」は、必然的に不適格な訳文を産出することにはならない。漢文「訓読というものは極端な逐語訳であった」(P44)と築島(1963)が言っている。例えば、「友あり、遠方より来たり、亦楽しからずや」といった読み下し文は、硬い感じは与えるが、不適格にはならないだろう。常識的に言えば、直訳による訳文は、逐語訳による訳文より、文法性が高いはずである。しかし、「極端な逐語訳」でさえ文法的な文を産出することができるのに、なぜ直訳という方法を使ってかえって不適格な文を産出することになるのであろう。

問題は直訳という術語をどう見るかにあると思われる。上記の直訳の例で言えば、文法対照研究者は、辞書のような普通の理解で直訳という方法を使っているのではない。(7a)では、he was learning to paintの部分は、一語一語文法に従って忠実に訳されていない。上記の辞書で言えば、このような訳し方は「意識」になる。つまり、問題にする個所だけ辞書で言うような「直訳」の方法を取り、他の個所は辞書で言うような「意識」の方法を取ることになる。しかし、翻訳の常識から言えば、少なくとも上記の was learning が「習っている」になるような処理法を、「意識」にするには抵抗がないわけではない。これらの処理法を直訳とするなら、辞書の説明では不十分である。

Catford (1965) はどのレベルで等価的であるかによって、翻訳法を「意訳」(free translation)、「直訳」(literal translation)と「逐語訳」(word-for-word translation)の三つに区別している。「意訳とは、制限を受けないものであり、等価関係が各ランクで上下に変動することができるが、より上位のランクに変動する傾向があり、文以上の単位間で変動することさえある。逐語訳とは、名称からも分かるように、語レベルに制限されたランク制限翻訳である(ただし、形態素対形態素の等価関係をも含む)。直訳は、このような両極の間にある。前述のように、直訳は逐語訳に始まるが、目標言語の文法に従って変化することが可能で(例えば、付加的な語を入れたり、すべてのレベルにおいて構造を変えたりするなど)、それを以ってフレーズ対フレーズ、あるいは文対文の翻訳にする。ただ、注意すべきところは、直訳が逐語訳と同様に、語彙上に逐語的に翻訳する——すなわち最高レベルでの(無条件の)語彙等価成分の可能性を以て語を翻訳する——傾向があることである。」(P 30) さらに、次の二つの翻訳例で説明している。

- (8) a It's raining cats and dogs.
 b Il est pleuvant chats et chiens.(逐語訳)
 c Il pleut des chats et des chiens.(直訳)
 d Il pleut a verse.(意訳)
- (9) a Бог сними!
 b God with them! (逐語訳)
 c God is with them! (直訳)
 d Never mind about them! (意訳)

説明と翻訳例で分かるように、逐語訳は、グロスをつけるような方法である。実際、対照研究においては、グロスをつける方法が使われているが、翻訳だとはされていない。直訳には目標言語の文法による調整が見られる。調整後の直訳の訳文は、目標言語として使わない表現か、あるいはその場の表現でないものになる可能性がある。そして、意訳は原文のコミュニケーション上の働きに対応する表現である。Catford は逐語訳、直訳、意訳の三つを区別するために、この二つの例を挙げたと思われるが、逐語訳で通用する場合がないわけではない。例えば、

- (10) a 他拉了我。
b He pulled me.

従って、上記の三つの翻訳法は、次のように補足説明をすることができる。

逐語訳は、訳文の文法性を保証しない翻訳法である。直訳は、訳文の文法性を保証するが、コンテキストの一致を保証しない翻訳法である。意識はコンテキストの保証を優先する翻訳法である。

直訳などは、翻訳論上の術語である。翻訳論の術語を使用する以上は、翻訳論の支持が必要だと思われる。以上の分析からすれば、対照研究で直訳と名乗っている訳文は、直訳でもないし、逐語訳でもないし、意識でもないことが分かる。もっとも、対照研究は翻訳研究ではない。だから、翻訳法を判断することは、その目的ではない。だが、翻訳を手段として使う場合がある。その場合、対照研究にとって翻訳方法の認定が必要でなければ、直訳など、翻訳論上の術語を避けたほうが無難だと思われる。その際、相当するとか、対応するなど、翻訳論と直接結び付きのない言い方をすることを提案したい。

実際、翻訳のほうでも、直訳や意識などははじめは、直感的な言い方として使われていたもので、翻訳者にしても翻訳研究者にそれぞれ自分なりに理解している。そのうち、Catford が等価の立場から「厳密に使われていない」

(P 30) これらの術語を操作可能な術語にした。しかし、いくら厳密にされたところで、翻訳自身にとっては何のプラスにもならないと言ってよい無用な術語である。というのは、実際に翻訳するに当たって、たとえこれらの翻訳法を念頭に置いてその区別を意識しながら翻訳操作をするにしても、よい訳文を産出するにつながるとは限らないからである。作例でなければ、実際の翻訳においては、逐語訳、直訳、意識のどれかの方法に限って操作する訳し方はほとんどない。「極端な逐語訳」とされる漢文訓読でも、「友あり、遠方より来たり、亦楽しからずや」というように、目標言語である日本語の文法規則に合わせるために、原文にはない用言の活用を行なったものである。

四、翻訳について

- (11) 太郎が手に新聞を持っている。
(12) 太郎がカメラを持っていく。
(13) 太郎がいい仕事を持っている。

同じ「持つ」という動詞で、様態、携帯と所有の意味を表すことができる。言い換えれば、様態を「持つ」という動詞の基本的意味にするなら、携帯と所有はその意味の延長にある。つまり、日本語では、「持つ」という動詞は、様態から携帯、所有へと意味的拡張をすることが可能である。こういう意味の違いは、私たちが普通共起関係にある「文脈」やコンテキストによって判断する。だが、異なった言語では、相当する語が同じように意味的拡張をするとは限らない。むしろ、違った方向に延長するのが普通である。(11)～(13)を中国語に翻訳すれば、(14)～(16)になる。

(14) 太郎手里拿着报纸。

(15) 太郎带相机去。

(16) 太郎有一份好工作。

「持つ」に相当する中国語の「拿」は、「拿着相机到处走」(カメラを持って歩き回る)でも、かばんにカメラを入れた状態で歩き回るのではなく、やはりカメラを手に持って歩き回ると解釈される。そして、(15)の「太郎带相机去」は「太郎带相机去了」になっても、「太郎はカメラを持っていった」と携帯の解釈が成立するが、「太郎拿相机去了」の意味は、「太郎はカメラを取りにいった」というように、携帯の解釈ができない。

実際の発話のとき、(17a)のように、意味解釈を発話の場という非言語的コンテキストにゆだねる場合がある。例えば、aとbの二人が町を歩いている。aが何か買い物をしようとして、お金が足りないのに気がついて、次のようにbに聞くがあり得る。

(17) a お金を持っているか。

b お金は持っているけど、手元には持っていない。

(17a)は「携帯」のつもりで聞いているが、(17b)はわざとこの発話の場という非言語的コンテキストを無視して、「所有」の意味で答える。(17b)の応答ができるのは(17a)の表現自体が携帯と所有の二通りに解釈できるからである。このように多義性を生かして発話するといった文字遊びの表現は、その翻訳可能性が偶然的なものと言えない。たまたま、中国語では「有」が携帯と所有の二通りに解釈されることが可能だから、次のように翻訳すること

ができる。

- (18) a 有钱吗?
b 有钱, 但手头没有。

この場合, (18a) で訳文を決めるのではなく, (18b) で (18a) の訳文を決めるのである。(18a) で訳文を決めるなら, 次のようになるが, 辻褄の合わない話になってしまう。

- (19) a 带钱了吗?
b 带钱了, 但手头没有。
c 有钱, 但没带着。

だから, (17) が (18) のように翻訳されたら, 表現の効果が伝わっているから, 訳文としては成立すると認められる。翻訳論の上では, それ以上に「持つ」の様態の意味との繋がりを追求しないのである。

このように, 翻訳はあくまでもパロールを対象とするものである。それは選択を経た, 結合済みの表現である。語の意味構造, 対立関係, 結合様式などが異なる二言語の間の翻訳可能性は, 偶然性の上に築かれるものである。それに, このように偶然に翻訳可能な二言語の表現は, それを支えているラング的側面が違う。まさに「相違における等価」である。だから, 翻訳は, ラング的側面の相違を認めた上で表現または表現効果の一致を求める作業である。つまり, 翻訳が求めるものはラングとしての言葉の対応ではなく, パロールとしての表現の対応である。

翻訳は, 表現を目的とするから, 原文が適格な表現であれば, 訳文も適格な表現であることを要求する。コミュニケーションの最小単位を文とするならば, 今では最早, 文法性を保証しない逐語訳という方法で文法性を考慮せずに文全体を翻訳するような翻訳者はいないだろう。だから, 今では, 実際に使われている翻訳法は, いわゆる直訳と意識である。翻訳もコミュニケーションである。異文化の間のコミュニケーションは, (8) や (9) のように, 似たような材料と結合様式で似たような表現結果を得るとは限らない。矛盾が生じた場合, 意識に解決法を求める傾向がある。

奥田 (1992) は「表情や身振り, 姿勢などの」「非言語行動」を, 「言語的側

面、つまり一度言語によって捕捉され、文字化されたもの、すなわち、『非言語行動表現』を考察の対象とし、日本語と中国語との間に存在する『非言語行動表現』の記号的意味のずれを検討」(P24)した。その一例として、「肩を落とす」を挙げている。

- (20) a その電車にお時と佐山が乗っていたという確証を重太郎はつかめずに、彼は肩を落として博多にもどった。(点)
 b 重太郎对于佐山与时子是否搭乘了那班电车，并没有获得确切的证据。重太郎很疲倦的回到了警署。(盲)
- (21) a 眼鏡ができるまで一週間かかるということで、前金を納めて昭子は、がっくりと肩を落としていた。彼女にとって眼鏡をかけるというのは由々しい事態である。(恍)
 b 眼镜需要一星期才配好，昭子预付了款项，感到一下子松了一口气，对女人说，戴上眼镜是一件讨厌的事情。(恍)

「肩を落とす」は、「“失意，失望”の精神情態を表すもの」(P25)で、「很疲倦的」(ひどく疲れているさま)と「松了一口气」(緊張がとけてほっとした)は誤訳だ。さらに、「无精打彩」(しよげる，元気のないさま)と「垂头丧气」の翻訳実例を挙げて、前者は抽象的な表現で、相当する中国語の表現は「垂头，耷拉着头」だと指摘している。

同じようなことは、澤登・ブラネン(1988)では、文化的分野の問題とされる。

- (22) a The old man narrowed his eyes when his grandson said, “Please take me there.”
 b 「僕をそこへ連れて行って」と孫息子に言われた時，老人は目を細めた。(P16)

「英語では narrow one's eyes は、不快感や不承諾を表わすときのしぐさである。日本語の『眼を細める』は愛情をもっていとしい者を眺めるときなどによく使われる表現であるから、原文の意味とほとんど逆の意味合いになってしまう。」代案として、「老人は眉をひそめた。(老人は顔をしかめた)」を(P25)出している。

このように、コミュニケーションの機能を似たようなものにするには、翻訳は必ずしも表現手段の一致を守ることはしない。ただし、表現手段そのものについての言及があった場合、つまり文字遊び的に表現する場合は、表現手段を守る工夫が必要となる。例えば、「提灯に釣鐘」という慣用句は、『広辞苑』（第四版）によれば、「形は似ているが、軽重の差が甚だしく、くらべものにならないこと。物事のつり合いがとれないこと。縁談などにいう。」という説明になっているが、『現代日汉大词典』は「〔彼此〕不相称；（分量）相差悬殊」と訳されており、『日汉大辞典』は「〔彼此〕不相称；（分量）相差悬殊；无法比拟」と訳されている。いずれも所記のほうを訳している。ところが、次のように使われると、このような訳は役に立たなくなる。

- (23) a 素琴先生は、大講堂の演壇に、箒の如き頭を振りたてて、新任の挨拶をせられるのである。

「私は未熟な者でありまして、前任の大野木克豊先生の後を承（う）けまして、丸で提灯に釣鐘のようなものであります」

そこで私共、……（中略）先生の演説を検討し、大野木先生を提灯にして、御自分が釣鐘のような事を云ってる、などと陰口を叩いた。（内田百閒「素琴先生」）

「私共」は、「提灯に釣鐘」という能記そのものを取り上げて陰口を叩いたのである。この場合、(17)と同じように、後ろの表現を元にして、前のほうの「提灯に釣鐘」がそれに合わせるように工夫すべきである。次のように翻訳することが考えられる。「提灯」と「釣鐘」そのものを訳文に表わしてはじめて、次に出てくる陰口を叩く表現の翻訳が可能となるのである。

- (23) b “……简直就像灯笼比吊钟——轻重大不同。”

作例でも、(7)の原文はコミュニケーションを想定した、適格な文である。だから、そのパロールとしての表現を、ラング的なものとして翻訳する——直訳も翻訳の一種である——のは、間違いである。翻訳なら、ちゃんと適格な訳文を出す必要がある。対照研究の問題提起として二言語の相違を出す必要がある場合には、同じような結合様式を取ることができないと説明すればよい。

五、翻訳と対照研究

翻訳は言葉の対照だけではない。翻訳には、加工が付き物である。問題は、どんなものとして加工するのか、またどの程度まで加工するのかにある。影山 (1996) では、『坊ちゃん』の英訳例で、「日本人 (S) の訳では『動き、推移、幅』を表す表現が使われているのに対して、イギリス人 (T) の訳では静止的ないし点的な表現が用いられていること」(P11) を指摘するために、次の例が挙げられている。

- (24) a しかし創痕 (きずあと) は死ぬまで消えぬ。(坊ちゃん 8)

T : But the scar will be with me for life.

S : I shall carry the scar to my grave.

- b 卒業さえすれば金が自然とポケットの中に湧いて来る。(19)

T : all you had to do was graduate for your pocket to be suddenly filled with money.

S : money would naturally come to one's pocket so soon as one got a diploma.

- c [温泉の] 深さは立って乳の辺までである (41)

T : The water was about breast-high

S : The water came up to your breast

- d まだ日が暮れないから寝るわけにはいかない。(43)

T : I could hardly go to bed yet because it was still broad daylight.

S : I could not well go to bed as the sun was not yet gone down.

- e 実の熟する時は起き抜けに背戸を出て落ちた奴を拾ってきて、学校で食う。(8)

T : When the nuts were ripe, I would go out the back door as soon as I got up, collect those that lay on the ground, and eat them at school.

S : At its fruiting time, the tree found me an early riser who would come out into the back yard in a night-gown, and gather the brown nuts on the ground;

these I would take to school to eat.

影山は、日本語が「動き重視」の言語で、英語が「結果重視」の言語であるから、日本語を母語とする日本人の訳した英語の表現も「動き重視」の傾向があるとして、上記の翻訳例を挙げたのである。動詞だけ、それにこれらの翻訳例を取り上げて観察するならば、そのような結論になるかもしれないが、ほかの角度から、またはほかの例を取り上げてみるならば、またほかの結論が出る可能性もある。

前にも述べたが、翻訳はパロールとしての表現を対象とするものである。こういう翻訳の立場から見れば、(24 a) の原文は非意志的表現だと言うことができる。TもSも原文の表現を加工しているが、Tが非意志的表現を守るのに対して、Sは意志的表現に加工した。(24 b) の原文はただ金が自然と入ることを言っており、どれだけ入るかは言っていない。Tはすぐにいっぱいになるような言い方をしているが、発揮しすぎと言わざるを得ない。(24 c) の問題点は、「立って」(二つの訳文ともこれが訳されていない)という測り方である。実際にそこに立って深さが足元から乳の辺まで感じるというのとらえ方と、一般論として立っているなら深さが乳の辺までというのとらえ方を、引用の部分だけでは両方取ることができる。そして、Tは後者のとらえ方で、Sは前者のとらえ方だと言える。どのとらえ方がよいかを判断するには、文脈を見る必要がある。この部分の前後は次のようになっているが、後者のとらえ方である。

- (25) まだある。湯壺は花崗石を畳み上げて、十五畳敷位の広さに仕切っている。大抵は十三四人漬ってるがたまには誰もいない事がある。
深さは立って乳の辺までであるから、運動のために、湯の中を泳ぐのは中々愉快だ。おれは人の居ないのを見済ましては十五畳の湯壺を泳ぎ巡って喜んで居た。

(24 d) の「まだ日が暮れない」も、やはり二通りの解釈ができる。①太陽という物がまだ見える、少なくとも日差しが見える、だから、②昼間なのである。今では、主に後者の意味に使われ、極端に言えば、雨天でも「まだ日が暮れない」と言える。Tは明らかに後者の意味を取っており、Sは前者を取っている。しかし、『坊ちゃん』では、この文のすぐ前に次のような表現がある。

- (26) (自分の部屋に)一寸這入って見たが、西日をまともに受けて、苦しくって居たたまれない。田舎丈あって秋がきても、気長に暑いもんだ。……

たまたま太陽という物が見えるから、Sの訳がよいと思われる。(24 e)についての説明は省略する。

このように、翻訳例を以って言語の特徴を説明する以上は、まず訳文と原文との関係を分析する必要があると思われる。以上の分析から分かるように、英語は動のか静のかの問題ではなく、翻訳の立場から(英語の)動的表现が要求されるかどうか、その要求が満たされているかどうかが問題である。だから、日本人が訳した英語表現だから、日本語の感覚が根底で働いて動的な表現になるという説は成立しがたいと思われる。

一方、日本語が静的で、その英訳が動的になる例も少なくない。Bowring & Laurie (1992)では、次の英訳例がある。

- (27) a あの女の子はかみの毛が長い。
That girl has long hair. (P 118)
b 象ははなが長い。
Elephants have long trunks. (P 119)
c 今朝からとても頭が痛いです。
I have had a really bad headache since this morning. (P 193)
d (私は)さっぱりした物が食べたい。
I want to eat something simple. (P 254)
e 自由がほしい。
I want freedom. (P 258)
f あそこに新しい家が建ちました。
A new house had been built there. (P 360)

そのほか、実例として、『雪国』の冒頭の文は、Seidensticker が訳した Snow Country では次のようになっている。

- (28) a 国境の長いトンネルを抜けると、雪国であった。
b The train came out of the long tunnel into the snow country.

以上の翻訳例からでも分かるように、日本語と英語に限って言えば、二言語とも動的表現もあれば、静的表現もある。そして、この二種の表現は翻訳の上では対応しない。だから、一方を基準に据えて翻訳を通して比較するのは、正しい方法とはいいがたいと思われる。

二言語の間の翻訳はあくまでも単方向的な行為であり、それに対して、対照研究は双方向的である。Catford が指摘しているように、「言語間の関係は、常に対称的でないにもかかわらず、双方向的だ (two-directional) とされている。翻訳は過程であり、常に単方向的である (uni-directional) : 翻訳は常に起点言語 (Source Language) “から” 目標言語 (Target Language) “へ” という与えられた方向で行なわれる。」(P 24) そして、単方向的であるかそれとも双方向的であるかは、翻訳と対照研究を区別するもうひとつの境目である。しかし、対照研究において、翻訳とのこのような区別を混同するケースがある。例えば、影山 (1996) は次のように英語の hard という副詞を取り上げる。

この副詞は英和辞典では「懸命に、精出して」のような日本語訳が与えられているが、これは正確ではない。次の日英語表現を比較してみよう。

- (59) a 少年は一生懸命に勉強した。

The boy studied hard.

- b 少年は一生懸命に英単語を暗記した。

*The boy memorized/learned the English words hard.

日本語の「一生懸命に」が主語の意図的な努力を描写し、「勉強する」とでも「暗記する」とでも使えるが、英語の hard は study と learn で違いを見せる。(P 74~75)

二言語辞書においては、例えば英和辞典の場合、hard に対しては、「懸命に」や「精出して」は翻訳の結果である。辞書に並ぶ単語の翻訳は、その単語の使い方を想定した上での翻訳である。だから、英和辞典の立場からすれば、起点言語の表現としての「The boy studied hard.」と目標言語の表現としての「少年は一生懸命に勉強した。」との間の対応関係が成立するならば、hard を「(一生) 懸命に」と翻訳するのは間違いとは言えない。翻訳は単方向的で、双方向的ではないからである。単方向的とは、Catford が指摘しているように常に起点言語から目標言語へという与えられた方向で行なわれるだけでなく、翻訳

作業がパロールを対象とするから原文への還元可能を前提としないということをも意味している。翻訳においては、まさに「逆は真ならず」である。「正確ではない」のは、翻訳結果である「一生懸命に」を以ってその元となる *hard* との逆方向における対応関係を追究するところである。「一生懸命に」を *hard* と訳していいかどうかは、英和辞典ではなく、和英辞典を作るときに考えるべき問題である。

翻訳は対照だけではない。と同時に、翻訳は完全な対照ではない。翻訳にある対照的な要素は、単方向的な対照である。

参考文献

- 石綿敏雄, 高田誠『対照言語学』, 桜楓社, 1990年。
- 奥田 寛「日・中両国語の『非言語行動表現』の比較——その記号的意味のずれを中心に——」, 大河内康憲編集『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』くろしお出版, 1992年。
- 影山太郎『動詞意味論——言語と認知の接点——』, くろしお出版, 1996年。
- Catford, J.C. *A Linguistic Theory of Translation* Oxford University Press, 1965.
卡特福德著, 穆雷译《翻译的语言学理论》, 旅游教育出版社, 1991年。
(頁数は訳本による。)
- 澤登春仁, ノア・S・ブラネン『機能的翻訳のすすめ』, バベル・プレス, 1988年。
- 築島 裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』, 東京大学出版会, 1963年。
- ヤーコブソン「翻訳の言語学的側面について」, ロマン・ヤーコブソン『一般言語学』, 川本茂雄・田村すず子・村崎恭子・長嶋善郎・中野直子共訳, みすず書房, 1989年。
- Richard Bowring & Haruko Uryu *An Introduction to Modern Japanese, Book One, Grammar Lessons* Cambridge University Press, 1992.
- Wilss, W. *The Science of Translation Problems and Methods* Gunter Narr Verlag Tübingen, 1982. 沃尔夫拉姆・威尔斯著, 祝珏、周智谟译《翻译学: 问题与方法》, 中国对外翻译出版公司, 1989年。(頁数は訳本による。)